

## 第二章 中君の物語 匂宮との京での結婚生活が始まる

[第一段 中君、京へ向けて宇治を出発]

皆かき払ひ(山荘はすべて片付けて)、よろづとりしたためて(出発の準備万端整い)、御車ども寄せて(迎えの牛車の列が玄関先に揃え寄せられて)、御前の人びと、四位五位いと多かり(御車の先導者たちには四位や五位の役職者たちがとても多く控えていました)。御みづからも(三の宮は御自らも)、いみじうおはしまさまほしけれど(参上なさる事を切望されたが)、ことごとしくなりて、\*なかなか悪しかるべければ(事が非常に格式張って、源氏殿の六姫との祝言を控えている手前、却って具合が悪いので)、ただ忍びたるさまにもてなして(あくまでも私事の女中という形で、ただ人目に付かないように地味な形で姫を迎えることになって)、心もとなく思さる(不本意に御思いです)。 \*「なかなか悪しかるべし」は注に<『完訳』は「人目を避ける点に注意。匂宮は東宮候補にもなぼり、帝と中宮からは忍び歩きを禁止され、夕霧の六の君との縁談も進行中である。中の君は、宮家の姫君ながら、匂宮には召人に近い相手でしかない」と注す。>とある。

中納言殿よりも、御前の人、数多くたてまつれたまへり(中納言殿からも行列の従者を数多く差し向けなされました)。おほかたのことをこそ、宮よりは思しおきつめれ(行列全体の仕立ては匂宮がお決め置かれていたが)、こまやかなるうちうちの御扱ひは(姫の御身内としての細々とした準備は)、ただこの殿より、思ひ寄らぬことなく訪らひきこえたまふ(偏に薫殿から行き届いた配慮を援助申しなさっていました)。

日暮れぬべしと(急がないと日が暮れてしまいますと)、内にも外にも、もよほしきこゆるに(女房たちも迎えの使者たちも催促申すので)、心あわたたしく、いづちならむと思ふにも(姫は気忙しく、宮邸はどういう所なのだろうと思えば)、いとはかなく悲しとのみ思ほえたまふに(本当に心細く悲しいとばかりに思えなさるところに)、御車に乗る\*大輔の君といふ人の言ふ(姫の牛車に同乗する大輔の君という側近女房が言う事に)、 \*「大輔の君(たいふのきみ)」は注に<中君付きの年老いた女房。初出。>とある。

「ありふればうれしき瀬にも逢ひけるを、身を宇治川に投げてましかば」(和歌 48-12)

「背を早み 身を宇治川に 早まるな」(意識 48-12)

\*注に<大輔君の詠歌。「身を憂」の「う」は「宇治川」の「う」と懸詞。「ましかば」反実仮想。『異本紫明抄』は「こころみになほおり立たむ涙川うれしき瀬にも流れ逢ふやと」(後撰集恋二、六一二、橘俊仲)。『河海抄』は「祈りつつ頼みぞ渡る初瀬川うれしき瀬にも流れ逢ふやと」(古今六帖三、川)「かかる瀬もありけるものをとまりみて身を宇治川と思ひけるかな」(九条右丞相集)を引歌として指摘。>とある。引歌指摘は参照類似歌の紹介で情緒説明を補完しているのだから、下敷きにして当歌に裏意を込めているわけでもなさそうなので、特に立ち入らない。「ありふれ」は八行下二段活用動詞「在り経(ありふ、生き永らえる)」の已然形、とのこと。事象や場合を示す「瀬(せ)」が川の縁語なのも、「身を憂し」で「宇治川に投ぐ」に掛けるのも、ほぼ常套句のように新味はないが、それだけに手堅く形の上での完成度は高そうだ。気の利いた詠み方ではあるが、歌筋は<生きてりゃこんな良い事もあるのに、世を憐んで宇治川に身投げしてたらね>みたいな言い方だから、女房同士で言い合う分には実

感のある本音でも、姫はまさに<世を儚んで>いるので、こういう言い方は故宮や故姫を軽んじた物言いに聞こえるだろう。

うち笑みたるを(こう詠んで、屈託無く笑っているのを)、「弁の尼の心ばへに、こよなうもあるかな(弁の尼の心掛けとは大違いだ)」と、心づきなうも見たまふ(と姫は気に入らなくお思いになります)。いま一人(もう一人の同僚女房がこう唱和します)、

「過ぎにしが恋しきことも忘れねど、今日はたまづもゆく心かな」(和歌 48-13)

「何よりも今日のはめでたい日ですから」(意識 48-13)

\*注に<女房の唱和歌。「過ぎにしが」は故大君をさす。>とある。この歌は情趣が無いので、大輔の君の歌への共感の言葉を七五調で詠み返しただけ、だ。が、読者には、女房の事情をととてもよく説明している。「過ぎにしが」の「が」は格助詞とされているようで、格助詞は体言に付いてその体言が話題の主題である事を示す、ということらしい。が、助詞はおよそ数式のような論理語であって、主題は体言が提示された時点で、その場でそれが主題であると、その場の出席者に認められる概念かどうかが決まるので、助詞はその体言に付いて語られる叙述の関係性を示すのであり、格助詞という言い方は係助詞の中の一定の性質を言おうとしているものに過ぎない、ように思えてならない。例えば、「を」はその体言に何かの作用が加わることを示す関係性であり、「は」はその体言が他の事柄に独立している状態を示す、などとも説明される。そういう論理関係性からすると、「が」は他の事柄が並立する、または別の可能性もある中で、その体言についての、またはその場合に於いての状態を示す助詞で、引き続き他の事柄についても言及するか、他の可能性を留保する言い方なのではないか。そうであれば、言い差して余韻を残す語用も取れるし、本題に対する周辺説明にもなるだろう。此处でも、下句の「今日はた」の「はた」は<もう一方>という言い方だが、上句で「過ぎにしが～忘れねど」と<一方>を枕に振っているので、その<もう一方>が本題である事が構文から示されている事になる。で、故姉姫の不幸を忘れてはいないが、今日とはともかくも妹姫の幸をお喜び申さないと、ということで、妹姫を出汁にすれば女房たちは手放しで上京を祝えるし、祝わなくてはならない立場でもある、というわけだ。

いづれも年経たる人びとにて(どちらも年老いた女房たちで)、皆かの御方をば、心寄せまほしくきこえためりしを(皆故姉君を主君と慕い寄り添いたく申ししていたようだったのを)、今はかく思ひ改めて言忌するも(今はこのように心変わりして今日は祝言だから姉姫のことは言わずに置こうというの)、心憂の世や(厭な世の中だ)とおぼえたまへば(と思えなさって)、ものも言はれたまはず(姫は何も言う気がなさいません)。

道のほどの(道中の)、遙けくはげしき山路のありさまを見たまふにぞ(遠く険しい山道の状態を実際に御覧になると)、つらきにのみ思ひなされし人の\*御仲の通ひを(つれないとばかりに思い見做された兵部卿宮のなかなか無い通いを)、「ことわりの絶え間なりけり(止むを得ない途絶えのようだ)」と、すこし思し知られける(と姫は少し思い知りなさいます)。 \*「おおんなかのかよひ」の「御」は匂宮への敬称だろうが、「なかのかよひ」は<途切れがちな中途半端な訪問>のことだろうから、漢字表記は「仲の通ひ」ではなく<半の通ひ>だろう。

\*七日の月のさやかにさし出でたる影(二月七日の夕方に高く照る向かい半月が)、をかしく霞みたるを見たまひつつ(情緒豊かに霞んでいるのを姫は御覧になりながら)、いと遠きに(都がと

ても遠いので)、ならば苦しければ(旅馴れていないので辛く)、うち眺められて(気分も沈んで、こう一句)、 \*「なぬかのつき」は注に<二月七日の月。半月で将来的希望を象徴。>とある。「半月」は、なかなか煮え切らない匂宮でもあり、半信半疑ながらも憧れる都や宮邸での暮らしでもありそうだ。ところで、満月に向かい半月の七夜は昼前に出て夜中の1時くらいに沈むらしいので、夕方には良く見えたのだろう。ちなみに、帰り半月の二十一夜は夜中の0時くらいに出て昼前の10時過ぎに沈むらしい。

「眺むれば山より出でて行く月も、世に住みわびて山にこそ入れ」(和歌 48-14)

「山を出て 上った月も 山に入る」(意識 48-14)

\*注に<中君の独詠歌。「澄み」に「住み」を掛ける。『集成』は「わが身のことから思うと、山から出て空を渡る月も、結局、この世に住むに堪えかねて再び山に沈んでゆくのでした」。『完訳』は「山の端から昇り山の端に沈む月に、宇治に帰るかもしれぬ運命を思う」と注す。>とある。また、参照歌指摘に<「都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」(土佐日記-二六)>とある。歌筋からすれば、「眺むれば」は無駄に冗長な気もしたが、美しい月に自分を準えるというはずいぶん背負っていて、さすがにそれに気が引けて、初めにこう断わらなければ、誰かに身の程知らずと窘められそうで、逆に体裁が悪い。尤も、独詠歌だから誰に聞かせるわけでもないが、自己客観視が無いでも無い自分の耳にさえ障るのだろう。

様変はりて(生活が変わって)、つひにいかならむとのみ、あやふく(最後はどうなるのだろうか)とばかり気になって)、行く末うしろめたきに(将来が不安になると)、年ごろ何ごとをか思ひけむとぞ(この数年は何の為に思い悩んでいたものかと)、\*取り返さまほしきや(出家の本意に照らせば上京は早まったかと、取り消したい気になるのでしょうか)。 \*「取り返す」は<元に戻す→白紙に戻す→取り消す>。

[第二段 中君、京の二条院に到着]

宵うち過ぎてぞおはし着きたる(姫君御一行は宵の内は過ぎた他人の出入りのない時分に二条院にお着きなさいました)。

見も知らぬさまに、目もかかやくやうなる\*殿造りの(見た事も無い様な、目にも目映い立派な寝殿造りが)、三つば四つばなる中に引き入れて(三棟四棟と建ち並んだ邸内に御車を引き入れると)、宮、いつしかと待ちおはしましければ(兵部卿宮は何時来るのかと待ち望んでいらっしやったので)、御車のもとに、みづから寄せたまひて下ろしたてまつりたまふ(姫のお乗りになっている御車の許に自らお寄りになって、姫を抱き下ろし申しなさいます)。 \*「とのづくりの、みつばよつばなる」は注に<『源氏積』は「催馬楽」此殿を指摘。>とある。催馬楽「このとの」の歌詞は「この殿は むべも むべも富みけり さきくさの あはれ さきくさの はれ さきくさの 三つ葉四つ葉の中に 殿づくりせりや 殿づくりせりや」と出典参照がある。「さきくさ」は春先に咲く草花のことらしいが、具体的に何を指すのかは未詳らしい。むしろ、具体性よりは幸先の良さをいう語呂かも知れない。

御しつらひなど、あるべき限りして(姫のお部屋の飾り付けなど、最上のもので)、女房の局々まで(女房の各控室にまで)、御心とどめさせたまひけるほどしるく見えて(匂宮のご配慮のあとがはっきりとわかるほどで)、いと\*あらまほしげなり(実に正式の新婦に相応しい御待遇でした)。

\*「あらまほし」は<望ましい。理想的だ。>という言い方らしいが、此处では単に御方様や上臈として迎えるのではなく、正妻の格式で迎えるに<相応しい>という意味なのだろう。但し、匂宮がそういう思い込みでいたとしても、帝や中宮や源氏殿やその他の世間がどう見るかは別問題だろうが。

いかばかりのことにかと見えたまへる\*御ありさまの(どうなることかと思われなさった姫への匂宮の実際の御待遇が)、にはかに\*かく定まりたまへば(急にこれほど立派な格式にお決まりになったので)、「おぼろけならず思さることなめり(匂宮は宇治姫をととても大事に思っいらっしやるらしい)」と、\*世人も心にくく思ひおどろきけり(と様子を見知った取り巻き連中も意外に思い驚いたのでした)。\*「おおんありさま」の「ありさま」は心理状態ではなく、その心理状態の結果も含めて具象した実態のことだろうから、部屋飾りの豪華さを述べた後に続くこの文の「御」はその部屋に居る姫に対する尊称だろうが、その状態を実現させたのは匂宮だということも含意する「御ありさま」ではあるわけで、文意上の実質での主語は<匂宮の御処遇>であり、全体を<御現状>と言い換えたのでは「ありさま」とは語意が違う現代語になってしまうようなので、非常に言い換えし難いし、実際に原文の文意もあまりすっきりしていない印象だ。\*「かく定まりたまへば」は注に<『完訳』は「定まり」とはあるが、正妻になったのではない>と注す。>とある。確かに、この輿入れは対外的には「ただ忍びたるさまにもてなして」(二章一段)いるのだから、公式なく正妻>ではない。また、二条院に姫を迎えることは中宮から指示されていた事でもあり、それ自体は「にはか」な話ではない。となると、この「かく」は<設えの夫人待遇に匹敵するほどの豪華さ=格式の高さ>を意味するのだろう。この文は、上文からの流れで読み下せば筋は分かり易いし、そんなに難しい言い回しでもないが、現代語への言い換えが困難という奇妙な紛らわしさがあるという点では、言葉が実態認識を示す場合の、その実態認識自体の当時と現代での違いまで、言い換えで示さなければならない好例かもしれない。\*「よひと」は<世間>ではあるだろうが、此处でいう<世間>はどれくらいの広がりを示すのか。「心憎し」は良くも悪くも<意外な深さ>に対する印象を示す語かと思われ、ということは、事前にある程度の想定があった事柄についての再認識であり、ということは、ある程度の事情を知っていた関係者が持つ思いなのだろう。ただ、敬語遣いは無いので家人や女房を初め、手伝いの家臣団及びその下っ端までも含む取り巻き連中、といったような語感かと思う。「けり」も意外性を示す叙述の助動詞でもあるようだが、ある程度の規模で収束した言い方にも聞こえる。

中納言は、三条の宮に、この二十余日のほどに渡りたまはむとて、このころは日々におはしつゝ見たまふに(中納言は三条宮邸にこの二月の二十日過ぎに移り住みなさる心算で、最近では毎日三条宮邸にいらっしやって準備をなさっていらっしやるが)、この院近きほどなれば、けはひも聞かむとて、夜更くるまでおはしけるに(この二条院の近くなので、この日は宇治姫の御輿入れの様子を知ろうと、夜更けまで留まっいらっしやると)、たてまつれたまへる御前の人びと帰り参りて、ありさまなど語りきこゆ(様子を探らせに差し向け申しなさった従者たちが帰り参りて、報告申します)。

いみじう御心に入りてもてなしたまふなるを聞きたまふにも(薫君は匂宮が宇治姫を非常に大事に思って迎え入れなさっている事をお聞きになるにつけても)、かつはうれしきものから(一方では望ましいことと嬉しく思いながら)、さすがに、わが心ながらをこがましく、胸うちつぶれて(その反面、みすみす姫を手放したのが我ながら馬鹿らしく、喪失感に胸が詰まり)、「\*ものにもがなや(惜しい事をした)」と、返す返す独りごたれて(と返す返す独り言を垂れて)、\*「ものにもがなや」は<自分のものにも出来たのに>で、「や」は反語表現だから<今となつては仕方が無い、惜しい事をした>が下に省かれている、のだろう。

「しなてるや鴉の湖に漕ぐ舟の、まほならねどもあひ見しものを」(和歌 48-15)

「山越えて 去り行く舟の 愛おしさ」(意識 48-15)

\*注に＜薫の独詠歌。「しなてるや」は「鴉の海」の枕詞。「しなてるや」から「舟の」までの上句は「真帆」に懸かる序詞。「真帆」は「まほ」(副詞)との懸詞。中君と同衾したことを回想する。『原中最秘抄』は「しなてるや鴉の湖に漕ぐ舟のまほにも妹にあひ見てしがな」(出典未詳)を引歌として指摘。＞とある。が、「しなてるや」は＜[枕]「片岡山」「鴉(には)の湖」にかかる。語義未詳。＞と大辞泉にある。となると、当歌の歌筋は下句の「まほならねどもあひ見しものを(まともな男女の仲として情事に至ったわけではないが一夜は直対面したものを)」に全てあって、上句は其を言い出す情緒演出の言い回しに過ぎず、尚且つ、その演出の語意が不明で効果が分からないまま、という読み方しか出来ない事になる。しかし、作者までが訳の分からない呪文を、訳の分からないまま唱えた、とは考え難い。だから、こういう言い回しをする意図は探って置きたい。ただ、上文に特に琵琶湖や近江や其等に関する話題が振られていないことから、上句に特別な意味はないか、あってもそれが決定的なものではない、と見做しても良さそうな雰囲気はあるし、確かに下句だけで前後の文意は通るので、一応は上句を洒落語用として考えてみる。で、まずは下句の「真面(まほ、まとも)」を言い出すために「舟の真帆(まほ、全面に風を受ける帆)」を引き、「舟」を出すために「湖に漕ぐ」と設定し、その「湖」は「鴉の湖(にはのみずうみ、琵琶湖)」だと情景を示し、また「には」の音で「まほならぬ」の前振りもし、「鴉の湖」の修辭として「しなてる(階照る、山肌に面する)」と詠み出した、というのはどうだろう。「しなてる」は＜語義未詳＞とのことなので、上の解釈は私の勝手な曲解かも知れないが、似た言葉に「しなかつ」という枕詞があるようで、この「しな」も＜階、坂＞を意味する説もあると古語辞典にもあり、可能性はある読み方かと思う。それに、この「しなてる」に＜山を隔てた＞くらいの語感までであるとすれば、今となっては＜縁遠くなった＞くらいの言い方にもなって、こう詠み出す説得力は増す気がするが、専門家が＜語義未詳＞と言うのでは、如何ともし難い。また、「鴉の海」の「鴉(には)」は鳥のカイツブリのことで、カイツブリが居る湖という言い方らしく、琵琶湖の呼称は江戸時代以降とのこと。尤も、カイツブリも室町時代以降の呼称らしく、水中を＜掻い潜る＞という意味とも言うが、他にも諸説あるらしい。まして、ニホの呼称由来は不明だ。だといふのに、「にはてる」という枕詞まであるそうで、分からないことばかりだ。

とぞ\*言ひくたさまほしき(とでも匂宮に皮肉を言いたかったのです)。 \*「いひくたす」は「言ひ腐す」で＜悪く言う。ケチをつける。＞。

[第三段 夕霧、六の君の裳着を行い、結婚を思案す]

\*右の大殿は、六の君を宮にたてまつりたまはむこと、この月にと申し定めたりけるに(右大臣の源氏殿は六姫を匂宮に差し上げ申しなさるのをこの二月中にと思ひ定めなさいっていたのに)、かく\*思ひの外の人を、このほどより先にと申し顔にかしづき据ゑたまひて、離れおはすれば(このように心外な宇治姫を六姫との婚儀に先立って向かい入れようと考えたことを隠しもせず、大事に二条院に御方様として就かせなさい、匂宮が六姫の居る六条院に寄り付かずにいらっしゃるのを)、「いとものしげに思したり(非常に不満げにお思いらしい)」と聞きたまふも(とお聞きになるのも)、いとほしければ(匂宮にはとても気懸かりなので)、\*御文は時々たてまつりたまふ(お手紙は六条院の六姫に時々差し上げなさいます)。 \*「みぎのおほと」は源氏殿だろうし、薫君の中納言昇進と同時に左大臣に就かれたかと思うが、此処では＜右大臣＞のままと記されている。 \*「おもひのほか」は＜意外＞という言い方が多いようだが、源氏殿が匂宮と宇治姫の話をしらなかったとは思えないので、此処で

はく心外な相手>と読んで置きたい。\*「おおんふみ」は匂宮から六姫に差し出したものらしい。匂宮の主語は察しが付くが、目的語の六姫は分かり難い。尤も、他の文意は考え難いから、その意味では察しは付くのだが、何と云うか、読み下す、または語り聞く語感として、私には掴み難い。

\*御裳着のこと(六姫の婚儀に先立つ裳着の儀を)、世に響きていそぎたまへるを(世に評判を轟かせるほど盛大な形で準備なさっていたので)、延べたまはむも人笑へなるべければ(匂宮との婚儀の保留を考えて、日延べなさるのも物笑いになるかと)、二十日あまりに着せたてまつりたまふ(源氏殿は二十日過ぎに六姫の成人式を挙げ申しなさいます)。\*「おおんもぎ」は六姫の成人式だろうが、六姫は何歳なのか。「裳着」は大辞泉に<主に平安時代、公家の女子が成人したしるしに初めて裳をつける儀式。結婚前の12、3歳ごろ、吉日を選んで行った。着裳(ちゃくも)。>とある。匂宮はこの年で26歳のはずだが、六姫が13歳として、匂宮と歳が離れていることよりも、源氏殿が51歳になっているはずなので、38歳の時の子ということで、男としては然して晩年の子ではないが、六姫の実母は惟光の娘で舞姫を務めた冷泉帝の典侍だった女なので、源氏殿よりは年上か少なくとも同年代であり、当時としては相当な高齢出産に当たるような気もするし、仮に多産な女で高齢であることに支障が無くても、他の兄弟たちとずいぶん歳が離れているし、子造りをした事に少し疑いも湧く。だから、六姫は20歳は過ぎているだろうと以前にも推理したような気がするが、むしろ此処の記事から六姫を13歳くらいと考える方が素直なのかも知れない。ただ、一条宮の養女として六条院夏の町で育てられたという記事が匂兵部卿卷二章六段にもあったので、その辺の整合性も含めて、どこかで年齢明示はして欲しい。でないと、どうも落ち着かない。

\*同じゆかりにめづらしげなくとも(同じ一族内での結婚は安定感はあるとしても勢力拡大にならないので目を引くものではないが)、この中納言をよそ人に譲らむが口惜しきに(弟君の中納言は他家の婿に譲るのが惜しまれたので)、\*「おなじゆかり」は<同じ血縁関係=一族>。注には<夕霧と薫の関係は、表面上兄弟である。>とある。

「さもやなしてまし(六姫は中納言に娶らせようか)。年ごろ人知れぬものに思ひけむ人をも亡くなくして(この数年人知れず心を寄せていた宇治姫と死別して)、もの心細くながめあたまふなるを(気弱に思い沈んでいらっしゃるようだし)」

など思し寄りて(などと源氏殿は思い付きなさって)、\*さるべき人してけしきとらせたまひけれど(腹心の者に薫君の意向を聞かせなさったが)、\*「さるべき人」は誰か。匂宮へ話を持って行ってある以上、それとは別に中納言に話を持っていくのは、帝に対する不敬とも取られかねないから、いくら我が子可愛さからとはいえ、内密に勧める他は無かったかと思う。であれば、使者はごく腹心の者で、中納言とも旧知の者ということになるのだろう。

「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く(姉姫の死に人生のはかなさを目近に見たので、とても気が塞いで)、身もゆゆしうおぼゆれば(自分自身も疎ましいものに思われますので)、いかにもいかに、さやうのありさまはもの憂くなむ(もう全くそのようなことは考える気になりません)」

と、すさまじげなるよし聞きたまひて(と中納言は気が進まない旨をお聞きになって)、

「いかでか、この君さへ(どうして薫君までが)、\*おほなおほな言出づることを(真剣に申し入れた婚儀を)、もの憂くはもてなすべきぞ(迷惑そうにあしらって良いものか)」 \*「おほなおほな」はく各自めいめいに>という語用もあるようだが、この語は「あふなあふな」と混用されると古語辞典にあり、「あふなあふな」はく真剣に。精一杯。>またはく分相応に。身の程に相応しく。>とあり、此処ではく真剣に>という語用らしい。

と恨みたまひけれど(と源氏殿は不満にお思いなさったが)、親しき御仲らひながらも(兄弟という親しい間柄ながらも)、人さまのいと心恥づかしげにもものしたまへば(薫君は人柄が緊張感のある一本気でいらっしやったので)、えしひてしも聞こえ動かしたまはざりけり(それ以上に強いて事を運ぶことはお出来になれませんでした)。

[第四段 薫、桜の花盛りに二条院を訪ね中君と語る]

\*花盛りのほど、二条の院の桜を見やりたまふに(花盛りの頃に、薫君は引越した三条宮邸から二条院の桜を眺めなされると)、\*主なき宿のまづ思ひやられたまへば(桜を置き残して主なき宿となっている宇治山荘が先ず思い出されて、その主であった宇治姫は山荘に取り残されて「寂しげな」桜と違って)、「心やすくや(二条院で「快適に」お暮らしでしょうか)」など、独りごちあまりて(など独り言を言っただけのあまりに)、宮の御もとに参りたまへり(匂宮の御座所に伺うということで二条院に参上なさいました)。 \*「はなざかりのほど」は注にく『集成』は「三月の上旬と思われる。薫は新築の三条の宮にすでに移っている趣」と注す。>とある。そういうことらしい。つまり、「見やりたまふ」の主語は薫君で、三条宮邸から北隣の二条院の庭の桜を見た、ということらしい。が、であれば、決定的に説明不足だ。確かに、二段には「中納言は、三条の宮に、この二十余日のほどに渡りたまはむとて、このころは日々におはしつ々見たまふに」とあり、三段には「御裳着のこと、世に響きていそぎたまへるを、延べたまはむも人笑へなるべければ、二十日あまりに着せたまつりたまふ」とあったので、御裳着の頃には、薫君や母入道宮が建て直した三条宮邸に引越する筈だ、とは思った。が、その確認を読者に与える意味でも、引越しに付いては触れるべきだし、その文に続いて当文が語られるなら、当文の主語省略は不当ではないが、源氏殿が主語の上文に続いて、更に場面転換もあった上で、この薫君の主語が明示されないという語り口は、何度も言うが、本当に作者の神経を疑う。是は時代性や生活感覚の違いという範疇を超える叙述の拙さだ。文末まで読んで意味を確かめれば主語や目的語や文構成などが分かってくるが、「花盛りのほど、二条の院の桜を見やりたまふに」と聞いて、この文の主語が薫君と、少なくとも断定できる人は居ないか、居たら可変しい。ざっと見ても、匂宮か宇治姫くらいは主語に思い付く。だから、こういう主語省略にはいつまでも馴れないし、苛立たしい。 \*「ぬしなきやど」の言い回しは、続く「心やすくや」に呼応する形で、下敷きにく「浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらむ」(拾遺集春、六二、恵慶法師)>が参照指摘されている。「浅茅原(あさちはら)」は本来のチガヤの群生地とは別に、人が住まずに雑草が繁って荒れた邸宅を示す言い方でもあったらしく、此処で言う「主なき宿」は宇治山荘のことらしい。さて、この引歌の「心やすくや」の「や」はく気楽になつたらしく>という半疑推量ではなく、反語のく決して気楽ではない>という言い方かとおもう。というのも、「主なき宿の桜花」という言い方は「主」という人間目線なので、「主なき」はく桜本位の自由さ>ではなく、人間本意の置き去られたく寂しさ>を桜の花に見ようとしていると思うからだ。特に、薫君の心情からすれば「主」は妹君ではなく姉君であり、死別の喪失感を重ね見ているかと思う。しかし、当文での「心やすくや」は妹君の二条院での暮らし向きに付いての懸念なので、此方は半疑推量のく落ち着いているだろうか>を意味する、という非常に凝った言い回しとなっている、ようだ。ところで、引歌の「心やすくや風に散るらむ」は、百人一首にも採用されて有名らしい「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」(古今集巻二春歌下 84、紀友則)の

下句を踏んでいそうなので、少し比較して置きたい。古今集の歌は詞書に「桜の花の散るを詠める」とあるので、似た趣きの歌には違いない。が、似て非なるもの、でもありそうだ。恵慶(ゑぎやう、えけい)の歌は「主」目線だが、友則(ともりの)の歌は<久方の穏やかな春の日に、何故か気忙しく桜は散り急ぐようだ>で、あくまでも桜本位の目線だ、と私は思う。人間の都合では何も変える必要が無い好日も、桜の都合では花の時期を終える大転換期だという事実を見つめている、のだろう。つまり、人間の都合で理解できるほど世界は一樣ではない、という広い視野が歌に奥行きを与えているからこそ、多くの人に何かを印象付けるのではないか。尤も、この歌の多くの解釈は<桜はどうして気忙しく散り急ぐのだろう>という人間目線の言い方になっているようだが、それでも歌の広がりや伝わっているらしい。ただ、私には友則の歌は理が勝った風情の無い歌に思えて、むしろもう一段、それが何かは不明だが、背景を秘めていそうな気もする。

ここがちにおはしましつきて(匂宮はこの二条院に居がちでいらっしやり着いて)、いとよう住み馴れたまひにたれば(宇治姫もとてもよく住み慣れなさっていたので)、「めやすのわざや(結構なことだ)」と見たてまつるものから(と薫君は思い申し上げながら)、例の、いかにぞやおぼゆる心の添ひたるぞ、あやしきや(例の自分の女だったらどうなっていたらと思う心と同時にあるというのも妖しさが漂います)。されど、実の御心ばへは(しかし薫君の本心は)、いとあはれにうしろやすくぞ思ひきこえたまひける(このような形に収まった事を、実にしみじみと安堵申しなさっていたのです)。

何くれと御物語聞こえ交はしたまひて(薫君と匂宮は何やかかのお話し合いなさって)、夕つ方、宮は内裏へ参りたまはむとて(夕方になると匂宮は御所へ参内なさるということで)、御車の装束して(御車を用意して)、人びと多く参り集まりなどすれば(従者たちも多く参集して来たので)、\*立ち出でたまひて、\*対の御方へ参りたまへり(薫君は寝殿を立ち去りなさって対屋の姫の御部屋に参上なさいました)。\*「立ち出でたまひて」は注に<主語は薫。>とある。文意からして察しは付くが、紛らわしさはあるのだから<君は>くらいの方が何故言えなのかと苛立つ。\*「対の御方へ」は注に<西の対の中君の方へ。>とある。「たいのおおんかた」が今後の宇治姫の呼称なのかどうかは分からないが、後見の無い女を正妻待遇は出来ないということで、姫は東の対には住めないにしても、輿入れ場面で西の対に御部屋を賜ったとは明示があって然るべきで、その上でこの「対の御方」という言い方になっていなければ、いかにも説明不足だ。この点については、当時の慣習に基づく生活感からすれば言わずもがなではあるのかもしれないが、それでも言うて悪い事でもなし、普通の分かり易い作文に留意があれば言うて当然だ。

山里のけはひ、ひきかへて、御簾のうち心にくく住みなして(姫君は山里暮らしの様子とは打って変わって御簾の内に重々しく住み着けて)、をかしげなる童の、透影ほの見ゆるして、御消息聞こえたまへれば(器量の良い童女が透き影にほの見える者をして、薫君が姫に御来意を申し上げなされると)、御茵さし出でて(御座布団が差し出され)、昔の心知れる人なるべし、出で来て御返り聞こゆ(昔からの顔見知りの女房らしき者が出て来て応対申します)。

「朝夕の隔てもあるまじう思うたまへらるるほどながら(朝夕の区別もなくお訪ねできそうに存じられます近さですが)、そのこととなくて聞こえさせむも、なかなかなれなれしきとがめやと、つつみはべるほどに(特に用事もないのにお訪ね申すのも却って馴れ馴れしいとの咎目があるかと遠慮申していた内に)、\*世の中変はりにたる心地のみぞしはべるや(季節も変わって姉君亡き後の時の流れが早いとばかり思える所為か)、御前の梢も霞隔てて見えはべるに(御庭先の桜



の梢も霞越しにみえますので)、あはれなること多くもはべるかな(宇治山荘が偲ばれて、感慨深い事も多くございます)」「\*世の中変はりにたる」は妹姫がすっかり匂宮の御方に収まった、という文意に訳文では取られていて、そういう含みは有るのかも知れないが、是は内心文ではなく、人を介しての発言文であり、人妻への遠慮は「なかなかなれなれしきとがめやと、つつみはべるほどに」と前置きされている構文なので、少なくとも表意は故姉君への哀悼と読んで置く。

と聞こえて(と申し上げて中納言が)、うち眺めてものしたまふけしき(遠い目をなさっている姿が)、心苦しげなるを(辛そうなので)、

「\*げに、おはせましかば(確かに姉君が生きていて殿といっしょにお隣に住んでいらっしやったなら)、おぼつかなからず行き返り(気兼ねなく行き来して)、かたみに花の色、鳥の声をも、折につけつつ、すこし心ゆきて過ぐしつべかりける世を(互いに花の色や鳥の声にも季節を感じて幾分と心楽しく暮らせたであろうものを)」\*「げにおはせましかば」は注にく以下「心ゆきて過ぐしつべかりける世を」まで、中君の心中の思い。『完訳』は「大君存命なら薫の妻となり、姉妹が夫人同士として親交できたらうとする」と注す。>とある。

など、思し出づるにつけては(など姉君が思い出されるにつけては)、ひたぶるに絶え籠もりたまへりし住まひの心細さよりも(一途に宇治の山里に隠れ籠もり住んでいた時の心細さよりも)、飽かず悲しう、口惜しきことぞ、いとどまさりける(妹君にはこの恵まれた都暮らしの方が、姉を失った尽きぬ悲しみと無念さはいつそう強まるのでした)。

[第五段 匂宮、中君と薫に疑心を抱く]

人びとも(女房たちも)、

「世の常に、ことごとしくなもてなしきこえさせたまひそ(普通の人と同じに、中納言殿を堅苦しく応接なさいませぬように)。限りなき\*御心のほどをば(限りなく深い殿の故姫への御愛情のほどを)、今しもこそ、\*見たてまつり知らせたまふさまをも(今こそは存じ申し上げていらっしやることを)、見えたてまつらせたまふべけれ(君から殿にお知らせ申し上げなさるべきです)」\*「みこころのほど」は注にく薫の厚意。>とある。が、長年の生活援助という意味での<厚意>は、こうして身分が納まった今さらに感謝を示して悪いわけではないが、特に「今しもこそ」感謝申すべき時とも思えない。やはり、この「御心」は<姉君への愛情>だろう。援助者に対する儀礼として親しみを示すべきだというよりは、姉君と心を通じた実感ある近い人として親しく接するべきだ、と女房たちは勧めた、と思いたい。それが真に心豊かな優しい暮らしだろうし、女はそういうのが好きだ。\*「見たてまつり知らせたまふさまをも」は注にく「たてまつり」は中君の薫に対する敬意。「せたまへる」二重敬語、女房の中君に対する敬意。以下の「見えたてまつらせたまふべけれ」の「たてまつる」「せたまふ」も同じ。>とある。非常に紛らわしい。

など聞こゆれど(など申し上げたが)、人伝てならず、ふとさし出で聞こえむことの、なほつつましきを(人を介さずに直にお話し申すことがやはり気が引けて)、やすらひたまふほどに(御方がためらっていらっしやる場所に)、宮、出でたまはむとて、御まかり申しに渡りたまへり(匂宮が出仕なさるといふ事でお出掛けの御挨拶を言いにお見えになりました)。いときよらにひき

つくろひ化粧じたまひて、見るかひある御さまなり(とても整然と正装し身繕いなさっていて、見映えのある御姿です)。

中納言はこなたになりけり、と見たまひて(兵部卿宮は、中納言は此方にいたのだったな、と御覧になって)、

「などか、むげにさし放ちては、\*出だし据ゑたまへる(どうして余所余所しく遠ざけて縁側に座らせていらっしゃるのか)。御あたりには、あまりあやしと思ふまで、うしろやすかりし心寄せを(あなたには他人とも思えず仲を怪しまれるほどに、手厚い援助をしてくれた人だというのに)。わがためはをこがましきこともや、とおぼゆれど(他の男をあなたに近づけるなど、我ながら愚かしいとも思えますが)、さすがにむげに隔て多からむは、罪もこそ得れ(さすがに取持ち功労者の中納言を無暗に部外者に置くのは罰が当たる)。近やかにて、昔物語もうち語らひたまへかし(御簾内に通して、近くで昔話でも為されれば良い)」 \*「出だし据ゑたまへる」は注に<御簾の外、すなわち簀子に。>とある。 \*「近やかにて」は注に<御簾の内の廂間に招じ入れて、の意。>とある。

など、聞こえたまふものから(など申しなさりながら)、

「さはありとも、あまり心ゆるびせむも、またいかにぞや(そうはいっても、あまり気を許すのも、また考えものだ)。疑はしき下の心にぞあるや(中納言には、油断ならない下心があるに違いないからな)」

と、うち返しのたまへば(と小声で耳打ちなさるので)、一方ならずわづらはしけれど(御方はそういう冗談も心当たりが無いでも無いので、一通りには聞き流せず気を煩わされたが)、わが御心にも、あはれ深く思ひ知られにし人の御心を、今しもおろかなるべきならねば(御方御自身の気持ちとしても、姉君への思いがしみじみ深いと思ひ知らされる中納言の気持ちを、今も疎かにすべきではないので)、

「かの人も思ひのたまふめるやうに(中納言殿が思い仰るように)、いにしへの御代はりとなずらへきこえて(故姉君の身代わりに準え申して)、かう思ひ知りけりと(御好意はよく分かっておりますと)、見えたてまつるふしもあらばや(申し上げる折もあれば良いが)」とは思せど(とはお思いになるが)、さすがに(そうは言っても夫の三の宮が)、とかくやと、かたがたにやすからず聞こえなしたまへば(何やかにやといちいち薫君との仲を疑って心配なように言い做しなさるので)、苦しう思されけり(困っていらっしやいました)。

(2013年6月27日、読了)